

札幌白石記念

# 難聴患者に助聴器活用

意思疎通図り不安解消へ

白石区の札幌白石記念病院（野中雅理事長・103床）第3病棟は、循環器疾患で入院する高齢難聴患者との意思疎通に助聴器を活用。確実に内容を伝えることで患者の不安を解消し、治療のモチベーションアップにつなげている。

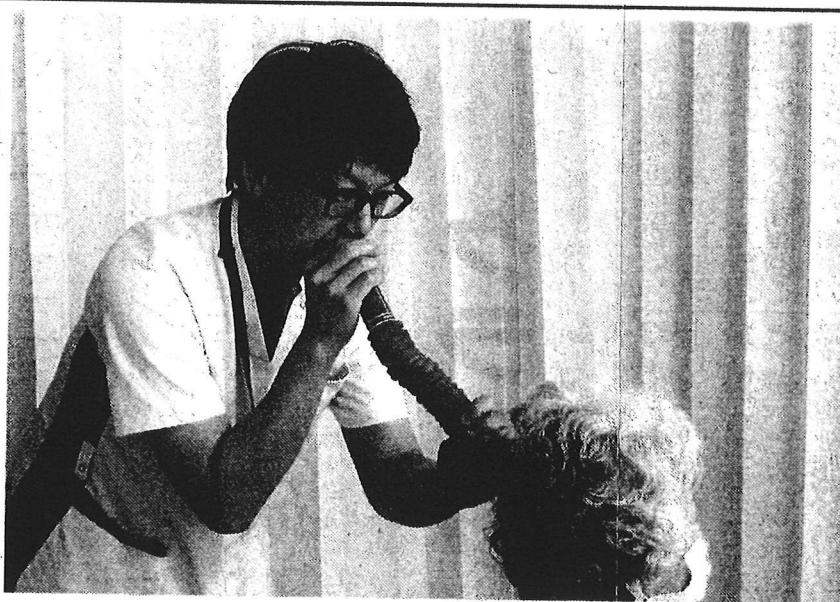
これまで高齢難聴患者には、ゆっくりと大きな声で話すことで、患者は怒られ声で、ジエスチャーを交えて説明してきたが、患者が内容を理解できず、看護師は同じ説明を何度も繰り返すことで必要以上に体力を消耗し、看護効率の悪化を招いていた。

さういふ大きな声で話すことで、患者は怒られてしまい、相槌を打つて理解したふりをし、分からぬことを質問できないといった悪循環に陥っていた。

改善に向けて、軽量で簡状のプラスチック製助聴器を使用し、看護師の声を患者の耳元に届ける取り組みを推進。これにより、看護師は表情を和らげ、優しい声で話せるようになつたため、患者の不安も解消し、円滑なコミュニケーションにつながった。

こうした様子を見ていた家族も助聴器を使用して会話するようになり、患者の治療に対する意欲が向上。寝たきりの長期入院患者が、退院できるまでに回復したケースもあつたという。

金澤大樹看護師は、「説明を一方的に『伝える』のではなく、『伝わる』ことを意識して、患者本位のケアを提供していくれば」と意気込んでいる。



助聴器を介し、検査結果や指示を確実に伝えている。